

『イエスは目を上げて、金持ちたちが賽銭箱に献金を入れるのを見ておられた。2 そして、ある貧しいやもめがレプトン銅貨二枚を入れるのを見て、3 言われた。「確かに言うておくが、この貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れた。4 あの金持ちたちは皆、有り余る中から献金したが、この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れたからである。』5 ある人たちが、神殿が見事な石と奉納物で飾られていることを話していると、イエスは言われた。6 「あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る。」7 そこで、彼らはイエスに尋ねた。「先生、では、そのことはいつ起こるのですか。また、そのことが起こるときには、どんな徴があるのですか。」8 イエスは言われた。「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがそれだ』とか、『時が近づいた』とか言うが、ついて行てはならない。9 戦争とか暴動のことを聞いても、おびえてはならない。こういうことがまず起こるに決まっているが、世の終わりはすぐには来ないからである。』

【説教】

本日の聖書の言葉は、神殿にイエスさまが訪れた時のことが記されています。神殿には大勢の人々が来ていて、皆献金を捧げていました。当時の神殿には、「女性の庭」と呼ばれるところに 12 個の献金箱が設けられていました。それらは、神殿で礼拝をしたり祈禱を捧げたりする時に人々が、捧げ物をするように設置されていました。イエスさまは、その中で一人の貧しいやもめが献金を捧げているのを、とりわけ注目されました。彼女はレプトン銅貨という当時の硬貨の最小単位のコインを、2 枚捧げました。このことがイエスさまの高い関心を引いたわけですが、それがどういったら理由からだったのか。とても興味を引くところだと思います。

やもめというのは、夫を亡くした未亡人のことです。当時の女性は生きて行く上での立場が弱く、夫を亡くすということは親戚の援助を受けられない限りすぐに貧困に陥っていました。ですので、その親戚の援助以外にも、彼女たちを保護しなくてはならないという法律がありました。つまり、やもめというのは人々から保護を受ける方であって、誰かの世話をするというような役割は特に求められていなかったのです。旧約聖書を見てみますと、そこには貧しく苦しんでいるやもめが助けられるという話がたくさんあります。しかし一方で、やもめが誰かを助けたりするという積極的な姿は、ほとんどありません。イエス・キリストの新しさというのは、一方的にこの人は援助される人、この人は援助する人という、そういった垣根を取り払ったところにあります。このルカによる福音書だけを見ても、一方的に支援を受ける人というのは出てきません。貧しい人もイエスさまの神の国宣教に参加しますし、それは豊かな人も同じです。病気の人は一方的に癒されるだけではなく、自分が人々を支え癒す役割も担います。罪深い人もその赦された喜びを、愛するという行為に変えて人々に仕えて行きます。つまり貧しい人も豊かな人も、健康な人も病を患う人も、皆対等に神の国に参与する機会を頂いているんだということです。

イエスさまは、「受けるよりも与える方が幸いである」とおっしゃいます(使徒言行録 20 章 35 節)。人に与えることができることは喜びです。それができない方が悲しいことなのです。神さまに捧げるものも、同じですね。献げられないということの方が、人間を本当の意味で貧しくしてしまうわけです。以前こういうことを聞いたことがあります。貧しいことの何が一番辛いのかというのは、人に何か頂いてもその好意に返せないことなのだと おっしゃった方がいます。物であっても行為であっても、それは交換すること、交流することで真の価値を引き出せるのだと思います。の流れを一方だけにしてしまうことは、返ってその相手を不幸せにしてしまうことになるでしょう。

そしてこの場合、イエスさまは決して無理をしなさいとは、言ってないと思います。自分の持分の中で交換することで、その本来の命の交流を活性化させることが、イエスさまのねらっているところだと思います。確かにここでは、このやもめは持っている生活費を全部献金箱に入れたのだとあります。しかし、これが本当ならば、この人はその日の夜からどうやって暮らして行くのでしょうか。これは今もそうだとのことですが、ユダヤ人の文化、そして中近東の文化は何でも誇張表現をしてその大切さを表すのだということです。このような言い方は、私たちの身近なところにもある

と思います。たとえば、子どもが親に何か物をねだる時にこう言うと思います。「ねえ買ってよ。クラスの人たち、みんな持ってるんだよ。持っていないの、私だけだよ」と言います。でも実際持ってる人は、クラスの中で 2、3 人しかいないのです。そういう誇張した表現なのだとということです。

イエスさまはそのようなヤマメの姿を褒める一方で、その献金が捧げられている神殿の崩壊をここで告げています。せっかく貧しいやもめが頑張って献金を捧げているというのに、神殿は一つの石も残ることなくきれいさっぱりなくなるのだとおっしゃいます。つまりイエスさまは当時の神殿のあり方を、大変厳しく批判しているわけです。このまま行くと神の家であるはずの神殿はなくなってしまう、そういう切羽詰まった危機的な状況を、イエスさまは見て取っていました。その崩壊の理由としてここで挙げられてるのは、その神殿は見事な石と奉納物で飾られていたということです。つまりこういうことですね。貧しいやもめが神さまを信頼して何とかして献金を捧げているというのに、実際それが使われているのは神殿の装飾をきらびやかにすることではないか。他にもっと献金の使い道があるのではないかということですね。この今日の聖書箇所のひとつ前を見てほしいと思います(20 章 46—47 節)。そこにはやはり律法学者という人たちが批判されていますが、彼らは「やもめの家を食べ物にし、見せかけの長い祈りをしている」とあります。つまり神殿も、律法学者と同じようにやもめのせっかくの献金を食べ物にし、見せかけの装飾でその権威を示そうとしてるのだとイエスさまは言いたいのですね。

当時の神殿は、この献金箱が置いてある「女性の庭」までしか女性は入れませんでした。その先の礼拝をしているところには、男性しか近づけません。また、もし自分が外国人であったとしたら、その「女性の庭」にも入れませんでした(手前の「異邦人の庭」まで)。まして病気を抱えている人たちは、神殿の境内にさえ入れてもらえなかったのです。このように、人と人の間に垣根を引いていたのでは、人々の繋がりや断ち切られてしまいます。本来の神さまが与えてくださる、物の交流、人の交流、いのちの交流というものは行き詰まり途絶えてしまいます。そうして人間の生活は行き詰まり、崩壊へと向かって行くのだというわけです。

イエスさまはここで、神殿の崩壊のしるしを、世の終わり、世界の終わりのしるしと重ねています。人々の暮らしを精神的に導く神殿が崩れ去ってしまえば、世界もまた終わりに向かって突き進んで行ってしまふのだということですね。その終わりのしるしとして挙げられているのは、戦争とか暴動です。戦争とテロと言った方が今の私たちには馴染みがあると思います。人間の罪深さは、戦争やテロ行為という形で終わりのしるしとして表れるんだということですね。

しかしここでイエスさまは、戦争やテロのしるしが出たからといって、それですべてが終わるわけではないとも、おっしゃいます。全くの暗闇が世界を覆い尽くすそうとたとえ見えたとしても、それで希望が潰えるわけではありません。確かにこの後イエスさまが予告したとおり、この神殿は崩壊してしまいました(およそ 35 年後)。しかしそれで終わりではありませんでした。神さまの御心を失った神殿は崩壊しましたが、しかし新しい神殿が、神の家として再建されました。それが教会ですね。教会という言葉は、エクレシアと言います。それはまだ礼拝堂のような建物のない時に人々の集まり、集会から始まりました。きらびやかな装飾品というのはありませんでしたが、しかしそこには人々を対立させていた垣根が取り払われて、生き生きとしたいのちの交流がありました。古い神殿が失っていた、大切なものが再建されたのです。週報の表をご覧くださいになって欲しいと思います。そこには「今年度の聖句」が記されていますが、キリストに結ばれたものしるしとしてこのようにあります。そこではもはやユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたはみなキリストにおいて一つだからです(ガラテヤ書 3 章 28 節)。これが、再建された神の家、神殿のしるしですね。私たち基督教も、とりわけ今年度取り組んで来たこれらのことは、教会が「キリストの体」としての教会であることの一歩大切なるしるしなのですね。そしてこれは、単に教会の中だけの大切さではなくて、世界が悪い意味で終わってしまわないためのものであります。教会の道行きは、世界の道行きとつながっています。私たちが地道に教会の中で、そして家庭やそれぞれが遣わされる場所で、この希望のしるしを大切にすることは、本当に大変意味のあることなのですね。

イエス・キリストが再び来られ、世界を完全に良きものに変えてくださるその時まで、私たちは終わりの時に生きる一人として、この希望を証して行きたいと願います。 祈り